



その通路は一際闇が深いように、キルヒアイスには思われた。ゴールデンバウム王朝の建築物の通弊たる、過剰なまでの装飾の放つ黄金の煌めきですら、通路に深く蟠る闇の浸食に、その身を委ねているかにすら見える。

「本当にお出でになるのですか？」

先導するベルゲングリューンが振り返る。歴戦の戦歴を類に刻んだ風貌が心なしか引きつって見えるのは、キルヒアイスの錯覚というわけではなさそうだった。

腰のホルスターに収めた熱線銃と、これも鞘に仕舞い込んだ戦闘ナイフの重みを確認し、キルヒアイスは頷く。この場所に赴くと決めたのは彼自身であり、彼自身の存在意義のためにも後に退くことはできなかった。

最初は他愛もない兵士達の噂だった。

「出る——」

人類が宇宙に出るようになってすでに一五〇〇年を超える歳月が流れている。にも関わらず、人類は地球上を徘徊していたころの類人猿の尻尾を完全にはなくしていないかのようだった。

歴戦の艦艇や要塞、古戦場の宙域、事故の多発する難所宙域には、必ずと言っていいほどにその手の噂がまわりついているのだ。

無理からぬこと——キルヒアイスはそう思う。准尉として軍人の道を歩み始めて、すでに七年近く。多くの兵士達と接してきた経験が、そう思わせる。戦争というぎりぎりの切所。露骨なまでの生命のやり取りの場では、ほんの少しの脚の置き場所や身体

の位置の違い。上官や敵の気まぐれ。飛び交うビームやミサイルの軌道の僅かなずれが、彼らの生死を決めてしまう。本人の努力や工夫ではどうにもできないことで、ヴァルハラに門に蹴り込まれるか、あるいはこの世で寿命を全うできるかが分かれてしまつた。ゆえに兵士達は、熟練兵になればなるほど縁起を担ぎ、彼らが予兆と呼ぶものに神経質だ。彼らが、『出る』と噂するのも、そうした意識の延長線上にある。それがキルヒアイスの理解だった。そうした噂を身近にしても、キルヒアイスは微笑って受け流すのが普通だ。七年という軍務は、既に兵役二〇年を超えるような古参兵には及ばないが、駆け抜けてきた戦場の激烈さでは決して引けを取るものではない。兵たちが信じるような、偶然による命拾いも何度も経験している。

その内の一度が、ここだった——僅かに息が上がるのを意識し、キルヒアイスは大きく息をついた。

「ローエングラム侯、我が主君ブラウンシュヴァイク公の讎をとりさせていただく」

聞こえるはずもない声。巨大なハンドキャノンを構えた男の低く抑えた、しかし、聴覚を圧して轟く声が何度も何度も反響し、重なり合つて不気味な余韻を引く。交錯する光の刃。胸を刺し貫く灼熱の苦痛が生々しく蘇り、キルヒアイスは思わず喘いだ。

「何を馬鹿なことを——」

アンスバッハの放ったレーザー・ビームがほんの数センチずれていれば、または、キルヒアイス自身があと数歩を前に歩み出たければ、彼はこうして再びガイエスブルグを訪れることはできなかったに違いないのだ。彼の半身、あの金髪の覇者に再び仕え、キルヒアイスにとつての唯一にして絶対の忠誠の対象たるあの女性と見えることも。

だからといって、キルヒアイスは兵たちの噂を首肯しない。叱

責もしないが、決して真に受けることもない。これまでは——

最初は捨ておく気だった。

リップシュタット戦役で貴族連合軍の根拠地となり、四〇〇〇家近い門閥貴族の当主と家族とが一同に会していた巨大宇宙要塞。戦役の末期には前途を悲観した多くの貴族達が自裁の道を選び、特に帝国暦四八八年九月、要塞の陥落に際しては数百人もの貴族達が絶望の中での集団自殺を遂げているのだ。不吉を嫌う兵たちが、『出る』と囁き合い、ガイエスブルグでの勤務を忌避するのは当然すぎるほどだった。

要塞としての機能を解除され、いずれは解体されて宇宙コロニーや辺境宙域への補給資材として流用される予定になっていたガイエスブルグだった。そのガイエスブルグが巨大移動要塞へと改造されることが決定されたのは帝国暦四八九年に入つて直ぐのこと。優先順位が押さえられた関係上、大幅に遅れていた工事が漸く最終段階に入ったのがほんの一ヶ月足らず前のことだ。二週間前にはラインハルト自らが『ブリュンヒルト』を駆ってガイエスブルグを訪れ、最初のワープ実験に立ち会ったのだ。

異変が起きたのは、ワープ実験が成功裏に終わり、ラインハルトがガイエスブルグ機動要塞の帝国軍への編入を命じた後だった。再び『ブリュンヒルト』を要塞に入港させ、ケンプ、ミュラー、シャフトらをねぎらつた後、ラインハルトはキルヒアイスと僅かな護衛兵だけを連れて、かつて戦勝式典を行った大広間を訪れたのだ。

キルヒアイス自身とアンスバッハが流したおびただしい血糊の痕こそ綺麗にぬぐい去られ、フロアは張り替えられていたが、ハンドキャノンの砲弾を浴びて崩れ落ちた壁面はそのままだった。

しばし、壁面に視線を据えたあと、ラインハルトはキルヒアイスを振り返つた。